

地域に密着した医療を目指した当院の取り組み (行動目標 8)

聖マリアンナ医科大学東横病院

小山照幸(医療安全管理対策室室長)

田中比露美(医療安全管理者)

中嶋孝司(安全管理担当副院長)

林 芳子(副院長、看護部長)

背景と目的

- ・ 当院は昭和16年に武蔵小杉に東横医院として開設され、その後徐々に規模を拡大し、地域の基幹総合病院として役割を果たしてきた。しかし2年前に新築した際に、脳卒中、心臓病、消化器病、女性健診に特化した病院に変わった。そのため対象疾患が限られ、受診しづらいといった声を聞くようになった。そこで今まで通り地域に密着した親しみやすく、安心してかけられる病院であるためにはどうしたらいいかを模索した。

取り組み

①「患者に名前を名乗ってもらう」

今まで患者確認は医療者側からの声かけ、診察券等で行ってきたが、同姓同名者の誤認などがなくならず、患者にもチーム医療の一員であること、自分の身は自分で守ることを啓蒙し、協力してもらうこととした。

方法としては、セーフティーマネジャーを中心に職員への周知を行い、患者には、ポスターによる掲示（掲示板、診察室入りロドア、診察机）、待合いディスプレイへの掲示を行った。

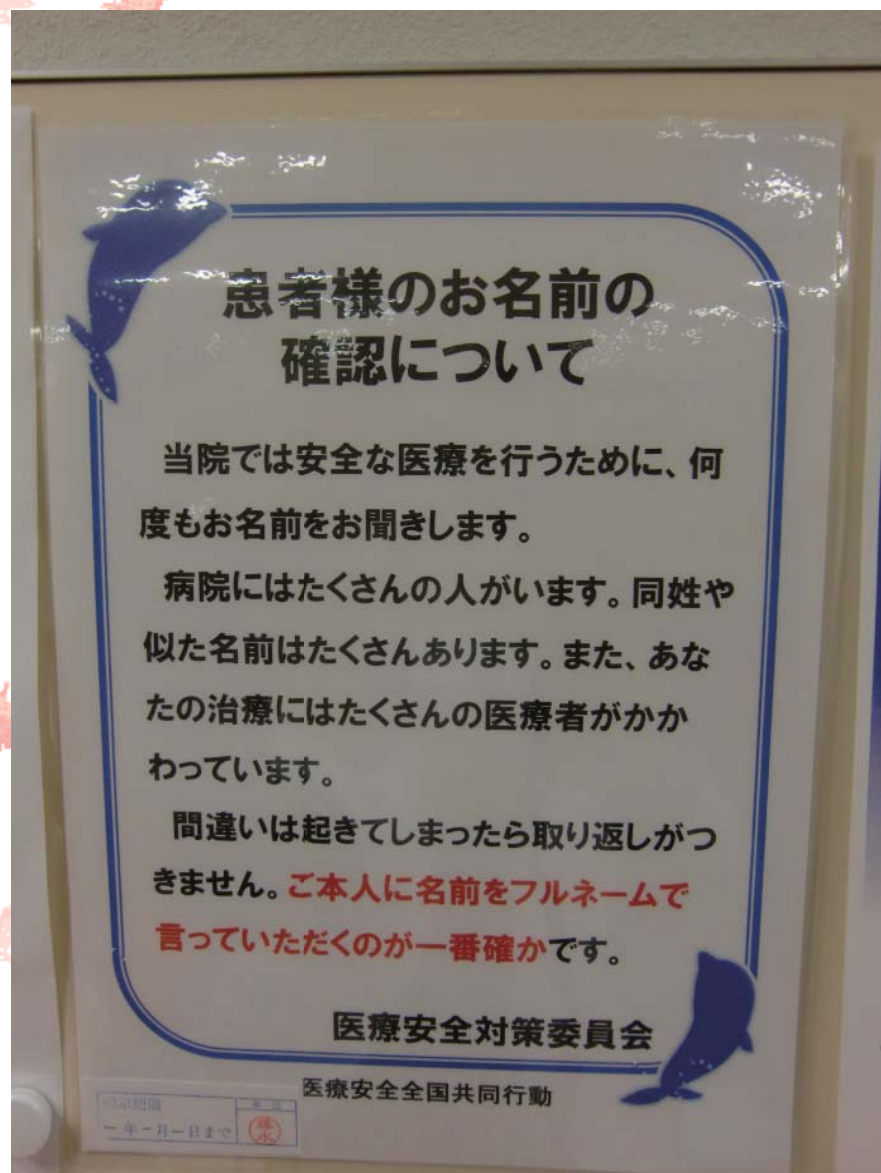
②「市民救急蘇生法講習会」の開催

受講希望者を募集し、医療安全推進週間に、リトルアンとAEDトレーナーを使用し、2時間の実習を含めた講習を行った。

結 果

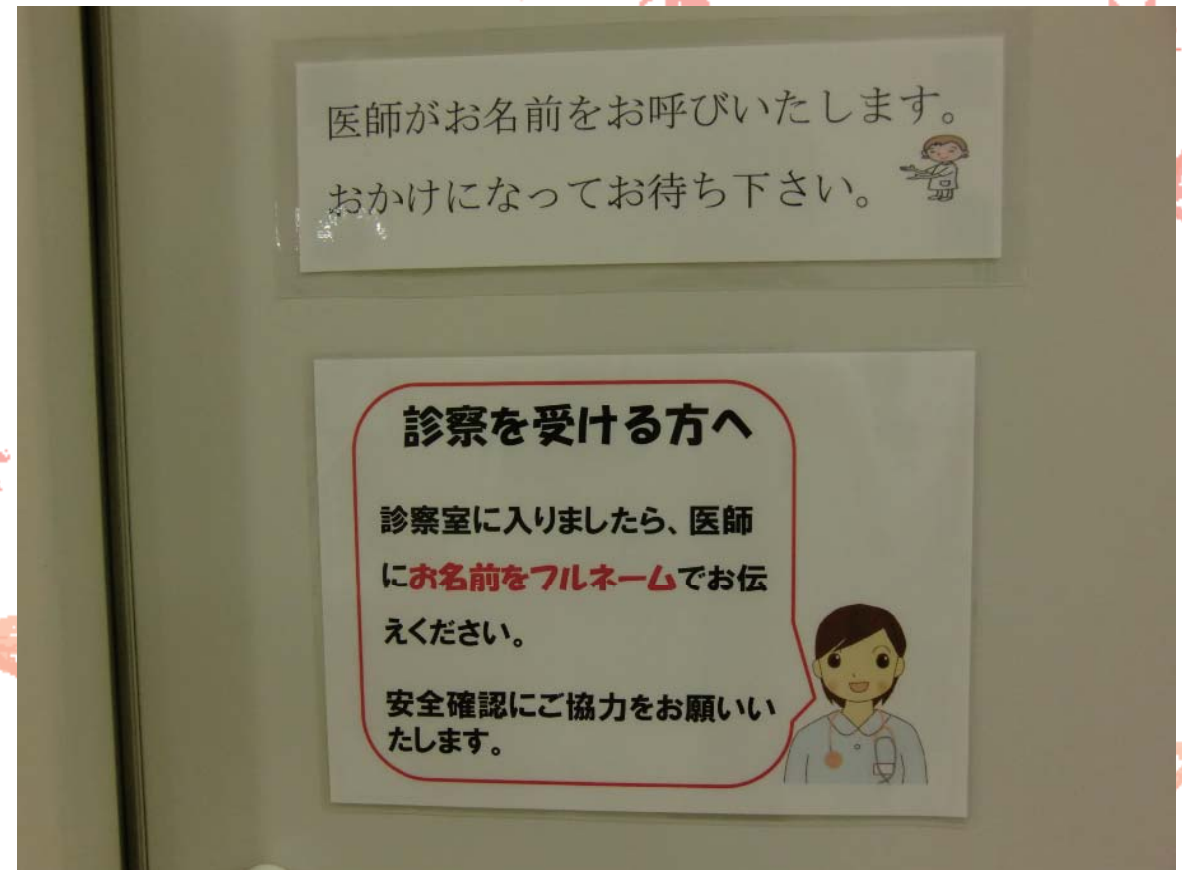
- ① 医師においては、「何年来の患者であるから間違えることはない」、などの反対意見があったが、病院長の決断のもと本年10月から開始した。
- ② 第1回目の参加者は12名で、最初は見ず知らずの人の前で実技を行うことに緊張していたが、一通りやるとすぐに慣れ、メンバー同士で良いチームプレーができていた。講習後のアンケートでは、好評であった。

院内掲示



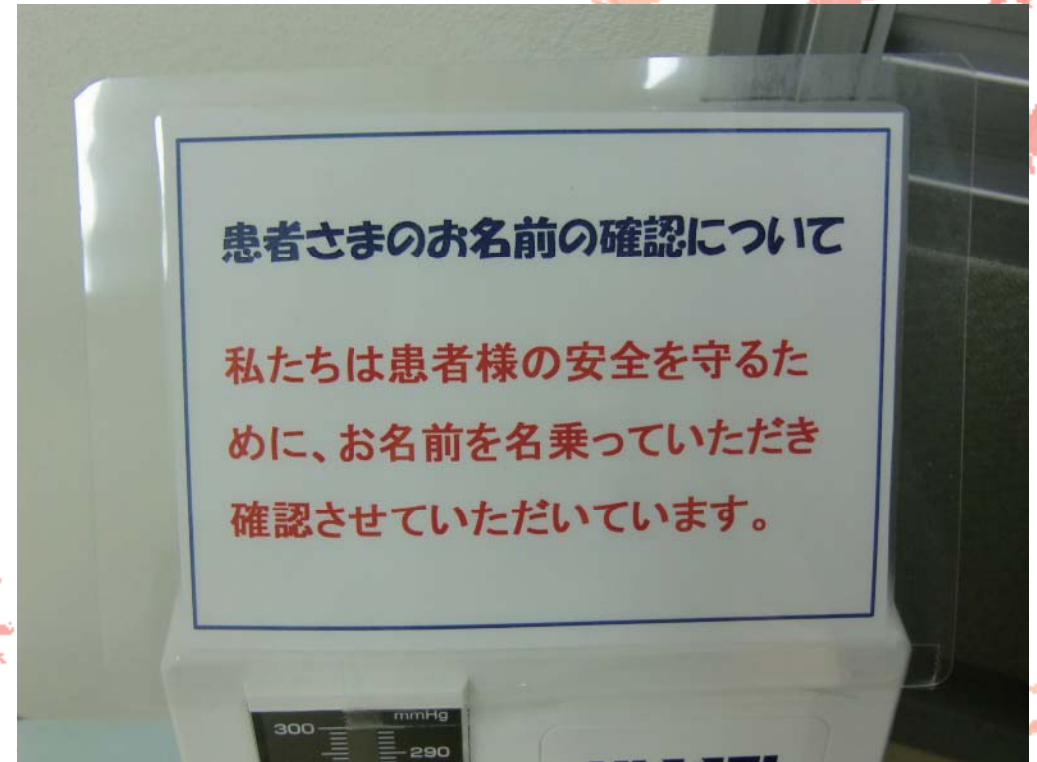
院内の掲示板および案内ディスプレイにも取り組みを宣伝している

診察室入り口前の掲示



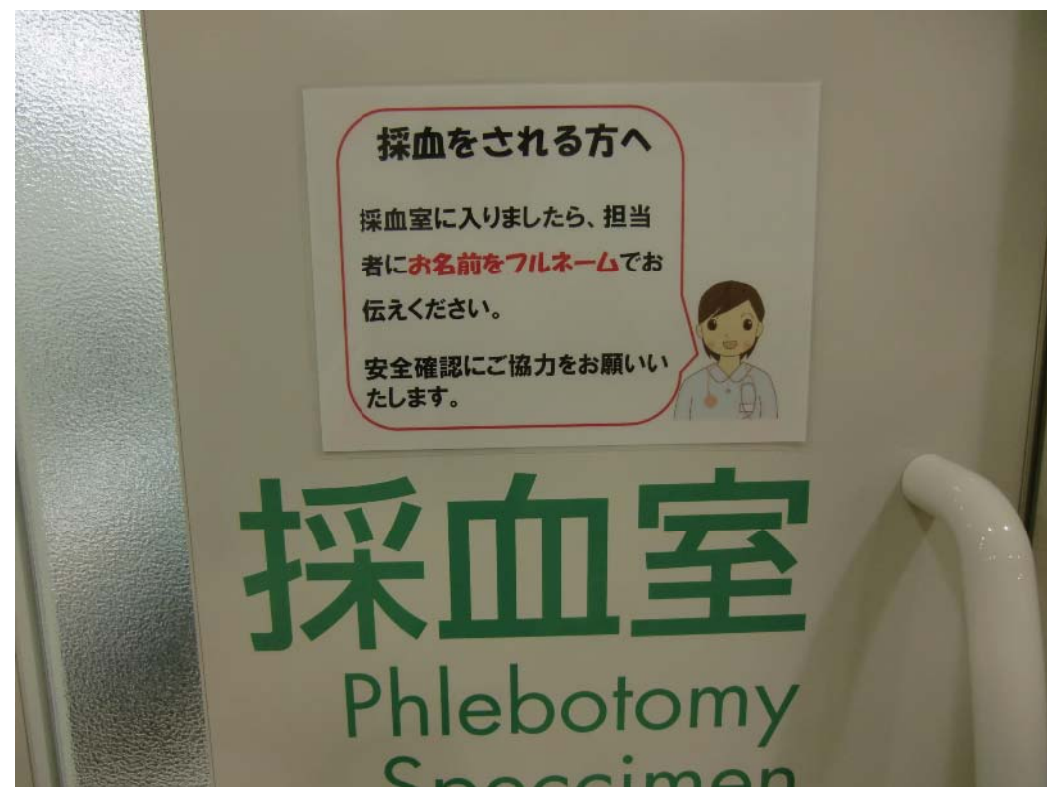
診察室に入る直前のドアに掲示し、協力をお願いしている

診察室内の掲示



血圧計の上に掲示してあり、診察前に医師がこの掲示を指さしながら、患者に名のってもらう

採血室の掲示



採血室の入り口にも掲示している



市民救急蘇生法講習会



年に1-2回、近隣住民を対象に2時間の実技講習を行っている。



考 按

- ・「患者に名前を名乗ってもらう」ということは、当初は医療者だけでなく患者にも抵抗感があったが、習慣化されてくるとあたりまえのこととして受け止められてきている。これで十分であるとはいえないが、患者にもチーム医療の一員であるということを理解してもらい、ともに安全に気をつけ、気を引き締め、行動することが重要であると思われた。
- ・蘇生法講習は、病院内で医療スタッフとともに少人数で実技習得するということで、人命救助に対する市民への啓蒙ができると思われた。

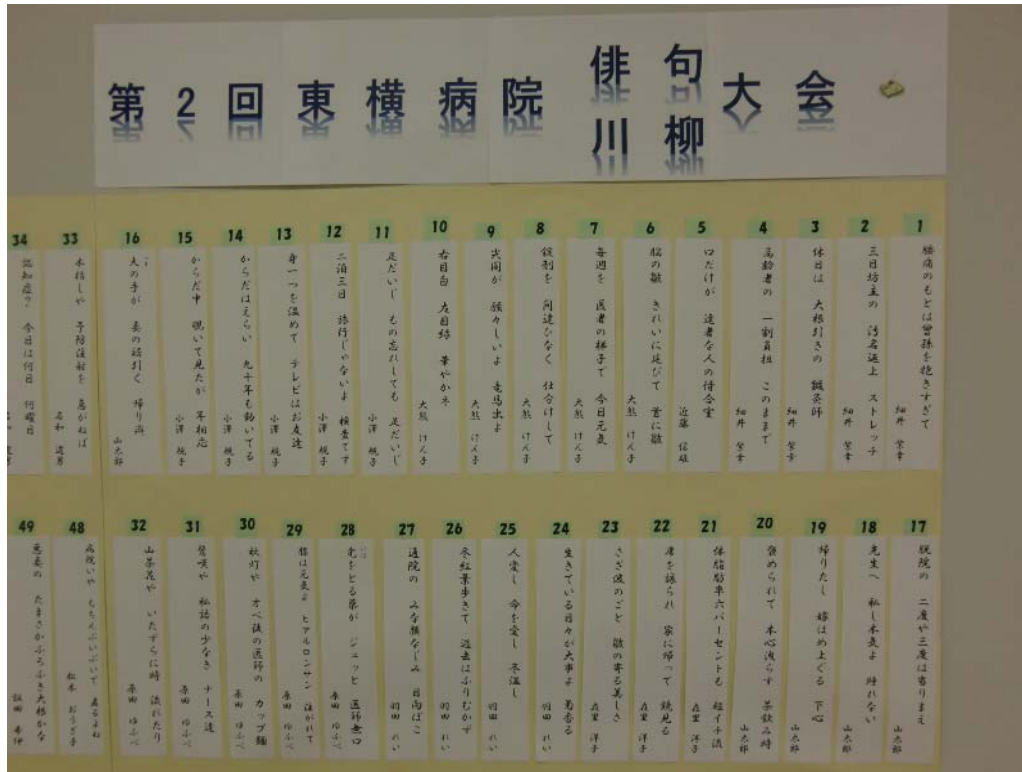


その他の取り組み

- 俳句・川柳大会
- 玄関コンサート
- 公開講座
- 東横健康倶楽部
- 東横ハートウォーク



俳句・川柳大会



医療安全推進週間に合わせて開催し、医療安全だけでなく、広く医療に関するテーマで市民、患者にも投句してもらっている



玄関コンサート



ボランティアグループのランパス会の企画で、毎月1回30分のミニコンサートを外来待合いで開催している。



公開講座



当院医師による脳卒中、心臓病、消化器病、女性疾患をテーマに毎月開催している



東横健康倶楽部



医師によるインフルエンザの講演



看護師によるフットケアの講演



東横ハートウォーク



年に2回春と秋に、心臓病センターの患者を中心に、多摩川、病院周辺の用水路沿いなどを医師、看護師、理学療法士とともに歩く。



東横ハートウォーク



今 後

- 将来的に患者アンケート調査をおこない、職員の実施状況やこの取り組みに対する患者の意見・感想を調査したい。
- 患者・市民への救急蘇生法講習、公開講座などを開催し、医療情報を提供するとともに、日頃からコミュニケーションをとり、安全で頼られる病院になるべく努力したい。